

委託事業実施内容報告書

平成21年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【日本語教室の設置運営】

受託団体名 財団法人 神戸キリスト教女子青年会（神戸YWCA）

1 事業の趣旨・目的

近年、外国人居住者の定住化に伴い外国人児童生徒の増加と外国にルーツを持つ子ども・年少者に対する日本語教育が兵庫県内でも課題となっている。学齢期の児童生徒に関しては日本語能力の有無を問わず居住地の公立学校に受け入れが行われ、入学後は教育委員会の援助・配慮の下に学校に多文化共生サポーターが派遣され、外国人児童生徒への支援が行われている。だが、多文化共生サポーターの役割は、通訳、学校生活への適応援助が主な目的であり、日本語指導や教科学習を含む学習言語習得にまで手が回らないのが現状である。地域の日本語教室でも年少者を対象にした日本語指導、補習的な教科学習支援の活動が取り組まれ、展開されている。しかし、外国人児童生徒はある程度日常会話ができるようになった場合でも、授業になると読み書きのみならず、聞いたり話したりも十分にできない場合が見られ、学習言語能力の育成・定着が課題とされている。

一方、学齢期を過ぎた15歳から18歳までの外国人生徒の場合は公立学校への受け入れが困難であり、受け入れが認められる場合でも厳しい入学試験・編入試験を突破しなければならないのが現状である。その際、一番大きな問題となるのが日本語能力である。家族と一緒に、あるいは呼び寄せで来日した外国人生徒が、短期間でどのように日本語能力を身につけるかが緊急の課題となっている。

そこで、来日直後で日本語が全然わからない、日本語が不十分なために教科の勉強が分からない、学校の授業についていけない、公立高校に進学・編入を希望して日本語を勉強している、など正式な日本語教育を受けていない13歳から18歳の外国人生徒を対象に、短期集中型の日本語初期指導の実施を目的にクラスを設置した。このクラスでは、文字、音声、語彙・表現、文型などを含む日本語の基礎的能力の習得を目標とし、合わせて日本語の構造の理解を核としたコミュニケーション能力の育成、学校の授業についていくために教科学習を含む学習言語能力の育成を目指して始めた。

2 運営委員会の開催について

【概要】

回数	開催日時	出席者	議題	会議の概要
1	平成 21 年 5 月 23 日	斎藤 明子 ほか 3 名	事業の趣旨・目的 の確認、内容検討	日本語教室運営の方 針説明と意見交換・確 認、日程・準備の検討
2	平成 21 年 7 月 16 日	斎藤 明子 ほか 3 名	第 1 回日本語教室 の日程・準備の確 認	受講生の募集方法、教 授者・支援者の検討と 確認等、日本語教室運 営の検討・確認
3	平成 21 年 11 月 1 1 日	斎藤 明子 ほか 3 名	第 2 回日本語教室 の日程・準備の確 認（時期の変更）	受講生の募集方法、教 授者・支援者の検討と 確認等、日本語教室運 営の検討・確認
4	平成 22 年 1 月 16 日	斎藤 明子 ほか 3 名	日本語教室の内 容、運営の総括	成果や問題点、運営に ついての意見交換

3 日本語教室の開催について

- ① 日本語教室の名称「学校に入るための日本語クラス」
- ② 開催場所 神戸 YWCA 会館
- ③ 学習目標
 - ・日本語の構造の理解を核としたコミュニケーション能力の獲得を目指す
 - ・学校の授業についていける日本語能力の獲得を目指す
 - ・高校進学準備・意識付け
- ④ 使用した教材・リソース
 - ・主教材・・・『みんなの日本語 I、II』『中級を学ぼう』
 - ・副教材・・・『はじめての漢字 300』『日本語総まとめ問題集 2 級文法編』
 - 各種ドリル
 - ・教具・・・絵カード、日本地図、辞書など
 - ・その他・・・募集チラシ（3 言語）
- ⑤ 受講者の募集方法
チラシの配布 関係団体への周知
別紙 チラシ参照
- ⑥ 受講者の総数 25 人（延べ人数ではなく、受講した人数を記載すること。）

別紙 学習者名簿参照

- ⑦ 開催時間数 115 時間 (全 2 回 第 1 回 60 時間 第 2 回 55 時間)
- ⑧ 日本語教室の具体的内容 (2 回とも 2 クラスで実施)

別紙 授業記録参照

第 1 回 (2009 年 8 月 10 日 ~ 8 月 28 日)

回 (※)	開催日	時間数	受講人数	内容
①	8 月 10 日	各 4 (2 クラス)	12	別紙参照
②	8 月 11 日	各 4 (2 クラス)	13	(以下同じ)
③	8 月 12 日	各 4 (2 クラス)	13	
④	8 月 13 日	各 4 (2 クラス)	14	
⑤	8 月 14 日	各 4 (2 クラス)	13	
⑥	8 月 17 日	各 4 (2 クラス)	9	
⑦	8 月 18 日	各 4 (2 クラス)	12	
⑧	8 月 19 日	4 + 0 (2 クラス)	6	
⑨	8 月 20 日	各 4 (2 クラス)	12	
⑩	8 月 21 日	各 4 (2 クラス)	12	
⑪	8 月 24 日	各 4 (2 クラス)	12	
⑫	8 月 25 日	各 4 (2 クラス)	12	
⑬	8 月 26 日	各 4 (2 クラス)	12	
⑭	8 月 27 日	各 4 (2 クラス)	12	
⑮	8 月 28 日	各 4 (2 クラス)	10	

第 2 回目 (2009 年 12 月 26 日 ~ 2010 年 1 月 11 日)

回 (※)	開催日	時間数	受講人数	内容
⑯	12 月 26 日	各 5 (2 クラス)	9	別紙参照
⑰	12 月 27 日	各 5 (2 クラス)	10	(以下同じ)
⑱	12 月 28 日	各 5 (2 クラス)	8	
⑲	12 月 29 日	各 5 (2 クラス)	9	
⑳	12 月 30 日	各 5 (2 クラス)	9	
㉑	1 月 4 日	各 5 (2 クラス)	8	
㉒	1 月 5 日	各 5 (2 クラス)	7	
㉓	1 月 6 日	各 5 (2 クラス)	6	
㉔	1 月 9 日	各 5 (2 クラス)	5	
㉕	1 月 10 日	各 5 (2 クラス)	2	
㉖	1 月 11 日	各 5 (2 クラス)	2	

⑨ 翻訳・通訳等の名簿

氏名	母語	当該教室での役割
亀井 容子	日本語	チラシ翻訳（英語）
川辺 比呂子	日本語	オリエンテーション通訳（英語）
郭 春雷	中国語	チラシ翻訳（中国語）
鄭 京	中国語	オリエンテーション通訳（中国語）

⑩ 教授者・支援者名簿

別紙 名簿参照

4 事業に対する評価について

① 当初の学習目標の達成状況

第1回（2009年8月）も第2回（2009年12月～2010年1月）も外国人生徒のレベル差が大きくて1クラスで運営することが不可能で、2クラスで実施した。

参加した外国人生徒の日本語能力、課題、意識、出席状況に違いがあるので学習目標の達成状況に対する一律評価は難しい。日本語指導に関しては、概算で三分の一程度の学習者には著しい成果があり、残りの学習者にはある程度の成果があったものの、一部の学習者には見るべき成果がなかったと言える。

一方、数学、英語などの教科学習指導に関しては、元々基礎的能力に大きい差があるうえに、高校進学を目前に控えた学習者は意欲が見られたが、そうでない学習者もあり、運営自体に苦慮した。担当した支援者は教材を複数準備する、レベルに見合った学習内容を提示するなどの努力をもって対応した。目的意識がある学習者は伸びたが、そうでない学習者も見られ、時期、内容、方法などの見直しの必要性があると思われた。

② 学習者の習得状況

日本語初期指導に関しては第1回目は、来日直後で所属学校がない学習者は著しく伸びたが、すでに公立中学等に所属している学習者は伸びがやや緩慢だった。中級レベルと位置付けた学習者群では読解や日本語能力試験2級レベルかそれよりやや易しい文型などの学習は、学校の勉強についていくために一定の効果があったと思われる。

第2回目は、レベル差が一層大きく、課題もバラバラなので個別対応、グループ対応にも限界があり、初級クラスとして運営することが困難だった。開催時期の途

中に休みを2回挟んでいたこと、後半は中学、高校の三学期が始まる時期と重なったことなどの影響もあり、まじめに参加した学習者は伸びたが、そうでない学習者も見られた。

漢字、作文、読解力、文法理解、高校進学への意識付けや教科学習への取り組み方など、総じて個人差の大きい習得状況だったと言える。

そのような状況のなかで、受講生の支援者から「2学期の実力テストが上がって本人がすごく喜んでいる。」「参加してとてもよかったと言っている。」などの声が寄せられたり、受講生からも「読解のやり方が少しわかった。」などの感想が寄せられているのはうれしいことであった。

③ 日本語教室設置運営の効果、成果

今回参加した学習者は、中国、インドネシア、ベトナム、ネパール、ブラジル、韓国などの外国人生徒であった。地域的にも神戸市を中心に東は尼崎、西宮、北は三木、三田、西は明石などに在住する外国人生徒たちで、遠くは姫路からの参加もあった。(兵庫県西端の上郡町の教育委員会からも問い合わせがあった。)

日本語ができない、日本語がわからない、日本語能力が不十分で学校の勉強についていけないなどの状況で外国人生徒はクラスに参加したのであるが、このタイプの日本語教室にニーズがあることがはっきりした。今回の経験をいわばケーススタディとして総括し、日本語教室がより具体的効果的に事業の趣旨・目的に合うようにしていくことが求められる。

④ 地域の関係者との連携による効果、成果 等

今回の日本語教室への問い合わせ、申し込みは外国人生徒の保護者からのものも含まれるが、大半は外国人生徒の所属学校の教員が多文化共生サポーターとして外国人生徒を直接支援・指導している方々、国際交流協会や外国人インフォメーションセンターなどで外国人に接し、情報提供などを担当している方などであった。また兵庫県日本語ネットワークの実務者会議等で、準備や進行状況を報告・協議してさまざまな協力が得られたことも意義があったと考える。また子ども多文化共生センターの協力で同HPに受講生募集チラシがアップされたことも募集には効果があった。

⑤ 改善点、今後の課題について(具体的に記述する。)

a. 現状

今年度は過去数年と比較しても日本の高校へ進学・編入を希望する外国人生徒が少なかったように思われる。だが、定住外国人の増加に伴ってその子弟である外国人児童・生徒は兵庫県でも確実に増えつつあり、外国人児童・生徒に対する日本語教育、学習言語習得、母語・母文化保持の課題は依然として重要な課題であり、受け入れが行われている学校現場でもその課題の解決に直面していることは疑いない。今後とも外国人生徒に対する支援を様々な形態・方法で可能な限り充実させて

いく必要があると考える。

b. 今後の課題

日本語教室の実施時期、内容、方法等を今回の経験を踏まえて見直す必要がある。時期については、参加者が受講しやすい夏休み期間に限定するなど時期をよく考えて設定する必要がある。また、日本語初級レベルの学習者は課題があまりにも違いすぎるので、個別対応、グループ対応が可能ないわば寺子屋式に教授者を増やす必要がある。(中級レベルの学習者はクラス授業が可能なので、現行通り一人の教授者が指導するクラス授業を基本とする。)

数学、英語などの教科学習については、志望制・選択制などを取り入れて希望者のみに指導する、夏休みの宿題を一緒に見て指導するなど、外国人生徒のニーズに見合ったものに改革し、より実際的な内容・方法に見直すことが望まれる。

また、受講生や保護者を対象にした進学相談の場を設け、先輩の体験を聞く、先輩と交流する、中学教員などの外部人材を含む専門家を活用し、よりきめ細やかな進学指導・支援が必要だと思われる。

c. 今後の活動予定、展望

今回実施した日本語教室に、学院独自のプログラム・コース等を連動させて、外国人生徒がより効果的な日本語習得が図られるように努める。今後とも神戸YWCA 学院は全力を挙げて外国人生徒への日本語教育、教科指導を含む学習言語習得、高校への進学指導などに取り組む予定である。その際、地域のネットワークを生かした連携を重視し、関係団体ともよく協議して進めていきたいと考える。

⑥ その他参考資料

日本語教室で使ったプリント・宿題など。